

第8章 一九二〇年代の政治改革、その逆コースと市川房枝

——政党内閣制黄昏期の内閣と議会と社会

村井 良太

はじめに——一九二〇年代の政治改革と首相選定の公然性

日本政治は第一次世界大戦後に大きな構造変化を経験した。一九二四年から三二年まで政党内閣が連続するとともに、このような政党間での政権交代は「憲政の常道」と呼ばれ、肯定、否定はあるものの当然視されるに至っていた。一九二七年は両大戦間期の政治的変化の重要な画期となった。すなわち、政党間で政権交代が行われる政党内閣制、地方選挙にまで拡大された男子普通選挙制、そして立憲民政党結成による立憲政友会との二大政党制が相次いで機能し始め、これら政党内閣制、男子普通選挙制、二大政党制の三者からなる政治システムは一九二七年の政治システムと呼ぶことができる。

以上の政治構造上の変化は、意図された改革の成果であった。日露戦後に萌芽し、第一次世界大戦を機に盛んになった日本における民主主義的傾向は、民本主義を高唱した政治学者吉野作造や、天皇機関説によって政党政治と調和的な憲法論を展開した憲法学者美濃部達吉をはじめとする活発な評論活動によって政治面にも及び、立憲政治のなかに事実上の民主政治を育んでいった。政治上の変化を促し、一九二〇年代の政治改革を主導したが、政治

体制の政党化を進めた原敬率いる政友会、政治体制の複数政党制化を進めた加藤高明率いる憲政会、そして最後の元老として政党内閣制の確立を受動的に推進した西園寺公望であった。¹⁾ なかでも一九二四年の第二次憲政擁護運動は政党内閣制の確立を求め、国民を背景として首相選定に一定の道筋をつけることでその公然性を高めようという意思は、西園寺にも共有されていた。西園寺は元老の再生産を拒否し続けたのである。

ところが、リベラル・デモクラシーを基調とする一九二〇年代の改革は、十年を経ずして早々に蹉跌を見、逆転していった。二大政党への批判は高まり、男子普通選挙制は弊害が強調された。そして政党内閣制に至っては、一九三二年に暴力によって政党内閣が倒されると、以後、敗戦後に至るまで政党内閣は復活しなかった。

本章の目的は、一九二〇年代の政治改革の意味を、主として女性運動家市川房枝の政党内閣制に向けた眼差しを通じて考察することである。なかでも一九二九年の世界恐慌から三六年の二・二六事件に至るいわば政党内閣制の黄昏期を中心に扱い、この時期における内閣と議会と社会との関係性のその一側面を明らかにする。

市川は、第二次世界大戦前には女性参政権獲得運動の主要な担い手の一人であり、戦中に大日本言論報国会理事を務めたことで占領下に公職追放を受け、解除後には参議院議員を現職で死去するまで五期二五年務めた。

一九二〇年代の政治改革について考察するうえで市川に注目する理由は三つある。第一に市川が米国で運動の方法と精神を学び、それを日本での運動に活かしたという意味で、米国デモクラシー型の運動家であったことである。

一九二〇年代は自発的な「中間団体」が躍動した「社会」の時代でもあり、体制化を主導した政党指導者達が「君民共治」の英国を模範とした一方で、米国デモクラシーの影響の大きさが指摘されてきた。²⁾ 民主政治下には民主政治下の、そして権威主義体制下には権威主義体制下の運動があるように、市川がどのように活動することができ、できなかつたのかは、当該期日本の政治体制とその変容を理解するうえで興味深い事例研究となるだろう。

第二の理由は、政党政治との関わりにおける彼女の二重の周縁性にある。一九二七年の二大政党化以来、両党を中心に政治が運営されていった一方、無産政党は少数党でありながらも議席数以上の存在感を持っていた。それは

男子普通選挙制実現などの「政治的デモクラシー」に次ぐ「経済的デモクラシー」の担い手として、同時代の知識人や青年層の期待を集めたからである。そのなかで、彼女は二大政党を中心とする政党政治の住人でもなければ、無産政党運動の住人でもなく、二重の意味で周縁にいた。彼女は社会民主主義政党への共感を隠さないが、他方、婦人問題という単一の政治課題に強い関心を抱くために、二大政党にも無産政党にも同化することなく、幅広い結びつきを維持していた。加えて、彼女はそのような視点を行動だけでなく言葉でも発信した。「婦人運動」に資するためには婦人の政治教育を主たる目的として、「×と□の対話」「政界の近況を語る」「婦選夜話」など、婦人の立場から婦人に向けた主として二者対話式的政治解説を、機関誌上で提供し続けたのである。彼女は揺れ動く同時代の政治課題や政治体制をどのように理解し、いかに説いたのか。市川の視線に捉えられた事象を通して政党内閣制の黄昏期に迫りたい。

最後に、彼女に注目する第三の理由としてその長い政治生涯をあげたい。彼女の政治生涯は一九八一年の死にまで及ぶ。本章の対象は主に第二次世界大戦以前であるが、日本におけるデモクラシーを、「戦前」と「戦後」を通して理解する一つの寄る辺ともなるだろう。

なお本章では、「政党内閣制」の語を、政党間での政権交代が当然に期待され政党内閣以外の内閣組織が排除される首相選定上のシステムとの意味で用いる。また、多く引用する婦選獲得同盟の機関誌『婦選』は、たとえば『婦選』一巻二号三頁を「(F一〇三)」と、同じくその後継誌『女性展望』を「(T)」と略記する。

一 市川房枝の政治運動——一九二七年システム下の内閣と議会と社会

本節ではまず政党内閣制の黄昏期を考察する前に、政党内閣制が十分に機能していた時期に内閣と議会と社会とがどのような関係にあったのかを市川房枝を通して考察する。市川は一九七六年二月の対談で、「婦人運動」を